

会議・視察報告

平壤出張記

ERINA 調査研究部主任研究員 三村光弘

2016年7月27日～8月3日の間、北朝鮮の平壤を訪れた。今回の訪問では朝鮮社会学者協会と朝鮮社会科学院法律研究所、同経済研究所、朝鮮国際貿易仲裁委員会、朝鮮商業会議所との交流が主目的であった。

新しい平壤国際空港

旧間に属するが、平壤国際空港のターミナルビルが完成し、運用を開始している。第1ターミナルが国内線、第2ターミナルが国際線として運用されている。第2ターミナルには搭乗橋が3つ設置され、飛行機の乗降は以前よりも便利になった。ただし、高麗航空が運用している機材のうち、ツポレフ204は搭乗橋を利用できるものの、アントノフ148は機材が小さいため、従来通りバスによる搭乗となっている。

写真1 平壤国際空港のターミナル



(出所) 筆者撮影

入国の際の荷物の検査は携帯電話を通行検査(国境警備局)が、コンピュータやカメラ、書籍、DVDやCD、USBメモリ、ハードディスクなどの媒体は税関に申告した後に出版物の担当が、それ以外は税関が担当する。X線検査を行った後、荷物の開披検査がある。以前はX線検査機が少なく、列ができていたが、新しいターミナルでは検査機が増設されているため、それほど並ばなくてもよくなっている。ただ、中国から平壤に飛ぶ飛行機には、貨物機かと思うほど大量の受託手荷物が搭載されている。その多くは、在外の貿易会社や機関から平壤に向けて送られるサンプルや部品、海外から調達した物資である。筆者が到着したと

きには、最近リニューアル開園した中央動物園の水族館で展示する熱帯魚とか、貿易会社のサンプル類が先に出てきて、筆者を含む多くの旅客の荷物が出てきたのは最後だった(70人乗りのアントノフ148で、荷物が出てくるのに到着後40分以上かかった)。

国産食品の増加

今回の訪問では、平壤市にある光復地区商業中心を訪れた。この施設は国内で生産している食品類が多く販売されているスーパーで、これまでも多くの国産食品類を見ることができた。今回の訪問では、以前にも増して国産食品の種類が豊富になっていた。

写真2 国産のあんパン



(出所) 筆者撮影

写真3 国産のリンゴジャムパン



(出所) 筆者撮影

写真2のあんパンは920朝鮮ウォン(約12円)、写真3のリンゴジャムパンは1000朝鮮ウォン(約13円)である。国産

品とはいっても、原料の小麦粉や砂糖、油脂類、包装材料などは中国から輸入されているのだろうが、国内で生産されたばかりの製品が並ぶことから、輸入品よりは国産品を求める消費者が多いそうである。

また、最近の水産部門への重視を反映してか、魚類の販売も盛んに行われていた。すべて冷凍販売であるが、イワシの場合1キロ4500朝鮮ウォン(約59円)で売られており、平壤に限っていえば市民へのタンパク源の供給がより円滑に進みつつあることが見て取れた。

光復地区商業中心には1階に食品主体のスーパー、2階に衣料品や雑貨、3階にカフェテリア式の食堂が入っており、3階の食堂は現物を見て注文する方式(日本の大学食堂やロシアのムームーのようなやり方)で人気が高い。筆

写真4 光復地区商業中心の売場



(出所) 筆者撮影

者も試食してみたが、味は割とよく、値段も国内通貨で支払え、4人で8万9300朝鮮ウォン(約1170円)と市内の外食食堂の半分から4分の1程度の価格で食事が楽しめる。

羅津港第3埠頭訪問

ERINA 調査研究部主任研究員 三村光弘

2016年8月7日午前に羅津港第3埠頭を訪問した。2014年8月の訪問以来、約2年ぶりの訪問であった。日曜日にもかかわらず、第3埠頭の責任者であるラソンコントランス社のエブゲニー・ソコフ氏が対応して下さった。

写真1 羅津港第3埠頭での荷役作業(貨車から石炭の積み卸し)



(出所) 筆者撮影

彼の説明によれば、羅津港第3埠頭は現在、完全に石炭専用埠頭として機能しており、主に中国向けの石炭輸出を取り扱っている。中国国内の仕向地は主に華東地区および華南地区で、2015年の取扱量は119万トン、16年の計画は250万トン、将来的には400万トンに増やすことが目標とのことであった。現在、4万トンの石炭を24時間以内に船積みすることができる能力があり、ロシアからの石炭の鉄道輸送は現在のところ70トン積み貨車で2両が一編成(1500

トン)となっている。今後北朝鮮鉄道と協議をして、2編成を続行して走行させることや、北朝鮮側に機関車の修理施設を設置し、より牽引能力の高い機関車を導入することによって一編成あたりの輸送能力を引き上げる構想もあることが紹介された。また、現在取り扱っている石炭は直径が50ミリ以下のものが主であるが、一般家庭などの需要が大きい、より直径の大きい石炭の取り扱いも開始し、さまざまな石炭の需要に対応できるよう、品目の多角化を図っているとのことであった。

写真2 直径の大きな石炭を試験的に取り扱っている



(出所) 筆者撮影

羅津港第3埠頭では、ロシアから貨車で運ばれてくる石炭を船積みするだけでなく、契約に応じて品質を管理する作業も同時に行っている。ソコフ氏によれば、貨車で運ば